

「
カ
フ
エ
・
ジ
ャ
ル
ダ
ン
」

1
話

小
竹
理
央

○カフェ『ジャルダン』・外（朝）

篠崎麻衣（28）、時計を見て疾走。

麻衣「もうまずいよ、遅刻だよ」

麻衣、ジャルダン前を通過。

靴が脱げて、

麻衣「あーもう」

靴を履き直す。

店員・五十嵐光（26）、高速で過ぎ

る麻衣の気配で店内から外を見る。

客「光君、明日もシフト入ってますか？」

光「入ってますよ、静香さんに会いたいから」

客「（照れて）えーじゃあ明日も来ます」

光「（笑顔）いつもありがとうございます」

○青空公園（朝）

子供が多くぶつかりそうになる麻衣。

麻衣「ごめんね、通るね」

走る麻衣。

公園の全景と誰もいないベンチ。

○ 駅・階段（朝）

ベビーカーを持って下る女性。

麻衣、女性を横目に階段下まで走る。

女性の方を振り返り、

麻衣「今は時間無いのに：ああ、もう」

と女性に駆け寄る。

麻衣「手伝います」

女性「親切にどうも」

麻衣、階段を下りきって、

麻衣「すみません、失礼します」

一礼してダッシュ。

女性「あ、ありがとうございます：」

○ 電車・社内（朝）

麻衣、恵比寿駅が目前で扉の前にて、

麻衣「早くして：」

男性1立ち上がり、男性2と対峙。

男性1「おい、お前俺の財布盗ったろ？」

男性2「は！盗ってねえよ？」

男性 1 「あ？ 鞆見せろ」

麻衣 「何喧嘩？：早く着いて：」

男性 2 「盗った証拠あんのかよ？」

男性 1 「なんだその態度？」

麻衣、下を向くと財布が落ちている。

麻衣 「あ：誰も気付いてないわけ：？」

恵比寿駅、到着。

麻衣 「なんでよりによって今：」

男性 1 「（胸倉掴んで）出せよこら」

男性 2 「盗ってねえよ」

麻衣 「（財布を拾い）すいません、財布、そ

こに落ちてました。失礼します」

男性 1・2 「え？」

ドアが閉まり、麻衣降り損ねる。

麻衣 「あ、待って、降ろして！降ろしてっ

てば：」

男性 2 「助けてくれたのに、残念だったねえ」

肩を落とす麻衣。

麻衣 「遅刻確定だ：」

麻衣 N 「これは出版社に向かう、28歳の私。

私が小説家になるまでの物語は小学校時代に遡る」

13

○小学校・教室（夕）

麻衣（10）、先生の前に立つ。

麻衣 N 「私が小学4年生の頃」

先生「麻衣ちゃんは作文が得意なのね。今年の読書感想文、2組の中で一番出来が良かったのよ」

麻衣「先生ありがとう！」

麻衣 N 「その年、初めて学年だよりに掲載された」

○中学校・教室（夕）

麻衣（14）、成績表を見る。

先生が来る。

麻衣 N 「中学校の時も」

先生「篠崎の書く読書感想文は面白いな！将来は小説家かー？」

麻衣「先生ありがとうございます！」

成績表の点数は全て50点以下。

麻衣 N 「国語も数学も歴史も化学も得意じゃ

なかった。けど文才だけは飛び抜

けてた。学年でも3本の指に入っ

ていた：と思う」

○大学・中庭

麻衣（20）、スマホで『ファンタジ

ア出版コンクール結果』を見る。

麻衣 N 「だから当然、自分には才能があると

思っ。大学生の時、小説のコン

クールに応募して」

麻衣 「お願い！神様、どうか：」

スクロールすると『優勝者 篠崎麻衣』

の文字。

麻衣 「うーしよい！」

周りの学生、麻衣に注目。

口を押えても笑みがこぼれる。

麻衣 N 「独創的な世界観が評価されて、晴れ

て憧れの小説家デビューを果たし

た」

○出版社・会議室

麻衣、上田武志（53）、石岡涼子

（27）が座っている。

麻衣「え！販売停止ですか！？でもどうして

そんな急に：」

上田「急ってこともないだろ？本当は薄々気

付いてたくせに。現実見る時ってこ

となんじゃないの？」

麻衣、言い返せないという目で上田を

見る。

上田「この際はっきり言わしてもらうけど、

篠崎さんの小説面白くないんだよ。

リアリティってのがないじゃない」

麻衣M「ファンタジア出版がなんでリアリテ

ィ追求するのよ？」

麻衣「それは編集長の主観ですよね？」

上田「新作の発行部数は二千部。実際売れた

部数千部未満。数字は嘘つかない

よ？」

麻衣「でも：」

上田「あと石岡さん、あれ出して」

石岡、読者アンケートを出す。

上田「ほらこれ。ぶっ飛びすぎて意味わかん

ない！つまらなすぎて金返してほし

い！宇宙人と火星人の恋とか誰に需

要あんだよ？」

石岡「（麻衣に）顔色悪いですよ、大丈夫で

すか？」

上田「つまり、世間は篠崎さんの作品欲して

ないの。分かる？利益面でも君の作

品はプラスどころかマイナス」

麻衣「：悪いところは直します」

上田「悪い所直すより、派遣とかバイト探し

た方がいいんじゃないのこれ」

麻衣、手をぎゅっと握りしめる。

上田「ま、とにかくこれは決定事項だから」

上田が席を立ち、追う麻衣。

麻衣「実は新しい案が浮かんでて、天使が赤

ワインを飲んだらバンパイアと入れ替わるとか空から落ちてきた河童が恋をするとか：

上田、ドアをバンツと閉めて風が麻衣の顔に直撃。

麻衣「ああ：もうなんでよ：

石岡「このような形になり、麻衣さんには申し訳ないです」

麻衣「石岡さんが謝ることじゃないです。私の問題です：

石岡「でもすみません」

○コンビニ・中（夜）

麻衣、漫画コーナーを通る。

梶田桜（26）、バイト着で漫画を並べている。

桜「：いらっしやーせー」

麻衣、ポテチとビールとアイスが無造作に籠へ入れて、レジに向かう。

麻衣「すみませーん」

桜、ダルそうにレジへ。

桜「お待たせしました」

桜、次々商品をスキャン。

桜「3円ですが、袋いりますか？」

麻衣「お願いします」

桜「15点で合計2564円です」

麻衣、財布を見ると残金540円。

麻衣「えっと、じゃ、カードで」

桜、カードを機械に差し込むとエラーが表示される。

桜「使えないみたいです」

麻衣「え？そんなはずなのに：じゃあこれと、これとこれ戻してもらえますか？：あ、あと袋もいらな

いです」

桜「かしこまりました」

麻衣、商品を鞆に詰め込みコンビニを出る。

桜「ありがとうございましたー」

鞆に詰め込んだビールが落ちる。

麻衣「私のビール：」

麻衣、泣くのを堪えてビールを拾う。19

フードを被った光、麻衣とすれ違いで

店内へ。

レジにて、

光「これあっためてください」

桜「これ漫画ですけど（顔上げる）」

光「漫画ですよ」

桜「光！」

光「寂しくて会いに来ちゃった」

光と桜、談笑して仲のいい雰囲気。

○マンション・郵便受け（夜）

麻衣、アルバイト募集のチラシを取る。

麻衣「バイトした方がいいってこと？時給1

500円か：今の給料より高いし」

隣人（302号室）の郵便受けから複

数のかわいい手紙が飛び出している。

麻衣「：今時ラブレター？」

麻衣、軽く郵便物を触ると大量の手紙が飛び出す。

麻衣「わぁ！なんで鍵空いてんのよ？」

麻衣、床の手紙をかき集めると涙が
頬を伝う。

何故か可笑しくて笑う。

麻衣「大した事ないって」

○同・麻衣の家・中（夜）

麻衣の携帯に通知が来る。

開くと『クレジットカード不正利用』
の文字が。

麻衣「不正利用？…だからあの時…」

× × ×（麻衣の回想）

コンビニ

麻衣「えっと、じゃ、カードで」

桜、カードを機械に差し込むとエラ
ーが表示される。

桜「使えないみたいです」

麻衣「え？」

× × ×

麻衣、ベッドに寝転がり、

麻衣「今日は神様ご機嫌斜め？なら早く機嫌
直してよ」

静かに泣く。

× × ×（時間経過）

朝

麻衣が寝ていると玄関のベルが鳴る。

麻衣「んー？この時間に誰？」

麻衣、インターホンを見ると母・篠崎

智子（58）が映る。

麻衣「え、お母さん？やっぱ」

智子「麻衣ー？鍵開けて頂戴？」

麻衣「どうしよ。あっはい、今開けまーす」

麻衣、アルバイト募集のチラシを隠し、

ポテチの袋を捨てる。

麻衣「もう、なんでこんな急なのよ？」

× × ×（時間経過）

智子、荷物を置く。

麻衣、軽く掃除する。

麻衣「来るときは連絡くらいしてよね」

智子「いいじゃない、彼氏もいないんだし隠

す物ないでしょ」

麻衣「彼氏はいないけど：心も含めて色々準

備が：」

智子「冷蔵庫を開ける。

智子「あら、何にもない。ちよつとちゃんと

ご飯食べてる？自炊も少しはしない

と」

ゴミ箱を隠す麻衣。

麻衣「わかってるって。大丈夫だから」

智子「麻衣。麻衣の体は麻衣だけのものじゃ

ない。麻衣の作品を楽しみにしてる

ファンみんなのものなんだから」

麻衣「：うん」

智子「お母さんこないだ、佐藤さんとこの奥

さんとランチしたの」

麻衣「へー」

智子「その時娘が小説家だって言ったらすご

いわねーってベタ褒めされちゃって」

麻衣「ちよつと、やめてよ：」

智子「お母さんね、麻衣が誇らしい。小説家

なんて最初はどうせ食べていけない
んでしょって思ってたのにね」

麻衣、首元を触る。

智子「それで今はどう？相変わらず忙しい
の？」

麻衣「え？ああ、えっとー」

智子「なーに？聞こえない」

麻衣「新作：取り掛かってるよ」

智子「そーなの！へえー」

麻衣「うん、しばらく新作の執筆かな」

智子「前回の出してからすぐ次の作品に入る

のねーお母さん感心しちゃう」

麻衣「そんな凄くないよ：」

○出版社・会議室

麻衣と石岡、向き合って座っている。

麻衣「それで話というのは？」

麻衣M「まさか、別れの挨拶？」

石岡「以前お話した通り、これからは通常の

小説執筆は継続できません」

麻衣「あー、今の状況って会社でいうところのクビ、ですよね？」

石岡「それは少し違いまして、この場合、会社でいうところのリストラ候補ですかね」

麻衣「リストラ候補？ならまだチャンスが？」

石岡「麻衣さんは近年うちがWeb小説に力を入れている事ご存知でしょうか？」

麻衣「最近流行ってますよね、電子書籍」

石岡「麻衣さんには我が社のWeb小説事業を盛り上げるお手伝いをして頂きたいんです」

麻衣「と言いますと？」

石岡「つまり、短編Web小説を書いて頂くって！短編なので20ページほどの小説で、これからは毎週！」

麻衣「ちょっとストップ！普通の小説なら200ページ以上の作品を10分の1以下にしろってことですか？」

石岡「まさにその通りです！」

麻衣「でもそれじゃ私の作品の良さが伝わら

25

ないんじゃない？」

石岡「今でも伝わっていないじゃないですか」

麻衣「うわ、しんらっ――」

石岡「麻衣さん。これはラストチャンスです。

毎週作品を出して、週間ランキング

1位になったら従来活動を再開さ

せます。どうしますか？」

麻衣、首元を触る。

麻衣「じゃあ：もし1位が取れなかったら？」

石岡「その時はもう：――」

麻衣「やっぱいいです！言わないでください

：やります！やってやります！」

石岡「期限は三か月です。三か月以内に1位

目指して頑張りましょう！」

麻衣と石岡、手を取って強く振る。

○同・廊下

麻衣、石岡が歩く。

高橋勉（34）の新作ポスターがある。

麻衣「あ、高橋先生だ。新作出したんだ」

26

石岡「初週売り上げ10万部突破したらしい

です。編集長がこのままなら100

万部は確実だって」

麻衣「私は千も行かないのに」

石岡「最近取材とテレビ出演で引っ張りだ

こみたいです」

麻衣「なるほど、心なしかポスターの写真ま

で煌めいているような」

石岡「そういえば麻衣さん、先生に憧れてこ

の出版社に決めたんですっけ？」

麻衣「はい。だからせめて一回くらいは会い

たいなあって思ってたんですけど……」

石岡「そうだ！もし良かったら、高橋先生の

新作持ってきてきましようか？」

麻衣「いいんですか？ありがとうございます」

石岡「ちょっと待っててくださいね」

石岡、部屋に入る。

麻衣、ポスターに吸い寄せられる様に

高橋の顔に手を伸ばす。

麻衣「私もこんな風になりたかったのに」

27

麻衣M「きっと学年3位程度の限界を知るに

は時間がかかりすぎた」

麻衣の手がポスターに触れそうになる。

石岡「お待たせしました！」

麻衣は手をスツとおろす。

石岡「先生の新作です」

石岡、高橋の新作本を差し出す。

麻衣「ありがとうございます」

麻衣、本を抱きしめる。

○マンション・麻衣の部屋（夜）

麻衣、机でパソコンを開く。

麻衣「短編小説なんて久しく書いてないのに」

麻衣、高橋の新作本を取る。

麻衣「：ちよつとだけならいいよね？」

× × ×

麻衣、床に座って本を読みながらクス

クス笑う。

× × ×

麻衣、ウロウロしながら次々ページをめくる。

麻衣「なるほどね」

× × ×

明け方

麻衣、ベッドに座り、本を閉じる。

麻衣「はあ、読み終わったりやっぱり先生の

本面白いなあ」

麻衣、伸びをして外を見る。

麻衣「え？もう朝！？何してんだ私は」

麻衣、アルバイト募集のチラシを見て、

麻衣「三か月。あと三か月は小説家だから」

○カフェ1・中

大勢の客がいて雑多。

麻衣、席に座り『篠崎麻衣 小説家』

で検索する。

麻衣M「現実味がなくて馬鹿馬鹿しい？私の

作風は素人にはわかんないよ」

麻衣、パンダのぬいぐるみを見て、

麻衣 M 「あ、そうだ！生まれつき白いパンダ^ダ

29

が徐々に黒くなって、ダークパン
ダとして世界を救う！とか？…
いや、だめだめ。さっそく現実離
れしてるって…」

子供が店を駆け回り、麻衣のコーヒー
を倒す。

麻衣 「あー！パソコンが…」

親が来る。

親 「息子がすみません」

麻衣 「いえ、お気になさらず…」

麻衣、荷物を拭きながら店を出る。

麻衣 「もう少し落ち着いた店がいいかな」

○カフェ2

店外

麻衣、空いている店内を眺める。

麻衣 「ここなら良さそう」

麻衣、店に入る。

麻衣 「お邪魔します」

店内

30

大音量で歌詞付きの音楽が流れている。

麻衣、耳をふさぐ。

麻衣「嘘でしょ、勘弁してよ……」

麻衣、店を出る。

麻衣「お邪魔しましたー」

○カフェ『ジャルダン』

ジャルダン前の道路

麻衣、不満そうに歩く。

麻衣「この調子だとカフェ探して一日終わる

し。無難なカフェ探して意外とハ

ードル高い？」

ジャルダン店内を眺める複数の女性。

麻衣、立ち止まる。

“C a f e J a r d i n”の文字。

麻衣「カフェ、じゃーでいん？」

探るように入店。

店内

女性客が複数。

麻衣 M 「ん？なにこの店。ここにも、そこにも、あそこにも女性！？」

女性たち、並んでレジの方を向く。

女性 1 「光くん、かつこいいい」

女性 2 「ホームページの写真より本物やば

い！」

女性 1 「ほんとそれ！」

女性 2 「話しかけてみよっかな？」

麻衣 M 「こう：くん？」

麻衣、オーダーの列に並ぶ。

カメラのシャッター音。

麻衣 M 「ん！盗撮？」

前の女性、レジの方にカメラを向け連写。

SNS に写真を『今日の光くんもイケメン』と追記し、アップロード。

麻衣 M 「ふーん？イケメンのカフェ店員がいるってわけか。でもイケメンつつたってたかが知れてるでしょ」

女性がはけ、光がレジにて弾ける笑顔。

後光が差す。

麻衣、光に目を奪われる。

光「いらっしゃいませ。カフェ・ジャルダン
へようこそ」

麻衣M「うお！前見えない！何このオーラ」

光「お客様？」

麻衣「（咳払いし）はい」

光「ご注文はお決まりですか？」

麻衣「（下見て）えっと、このお店のおすすめ

めって何ですか？？」

光「本日のおすすめは：」

コーヒー豆をすり潰し、混ぜ合わせる

音と光の手元。

光の声「エチオピア産イルガチエフエにケニ

ア産の△△グレード、グアテマラ

産のアンティグアを4…3…3で

混ぜ合わせたブレンドコーヒーで

す」

黒光りした豆が機械で躍動し、麻衣は
唾を飲み込む。

光の声「焙煎を軽めにと豆の中の酸味成

33

分が残って、フルーティでコクのあるコーヒーができます」

麻衣「：じゃあそれで」

光「かしこまりました」

光、注文を打ち込み、コーヒーのカップを手慣れた様子で手に取る。

光「お名前：聞いてもいいですか？」

麻衣M「え？ナンパ？」

光「お客様のお名前は？」

麻衣「篠崎：麻衣です」

光「麻衣さん。かわいい名前」

光、コーヒーカップに名前を書く。

麻衣「そういうことか：」

光「店内ご利用ですか？」

麻衣「そうです」

光「出来上がったら持ってきますね。ちょっとだけお時間頂きます。先、座っていてください」

目を合わせず会釈する麻衣。

全体を見渡せる席に座る。

麻衣 M「うわー今の会話、緊張したゝあの笑

顔は何？計算？魂胆？策略？」

麻衣、パソコンを開く。

麻衣 M「そんなことより、今は小説に集中し

なきゃ」

麻衣、パソコンを見つめるが手が動かない。

適度に空いた店内を見渡す。

麻衣「：へえ、意外と空いてるんだ」

麻衣、『カフェ ジャルダン』と検索。

光の写真が出てきて見入る。

麻衣「うわあ：写真でもイケメン：」

光、麻衣の背後から来る。

光「麻衣さん」

麻衣、素早くパソコンを閉じる。

麻衣「（裏声）はい！？」

光「コーヒーお持ちしました」

麻衣「あ、ここ、置いといってください」

光「かしこまりました」

光、麻衣に顔を近付けてコーヒーを差し出す。

麻衣「（ドキッ）…」

光「ごゆっくりどうぞ」

麻衣「…どうも」

レジに戻る光。

麻衣M「ふう…なんか暑い。ていうかあの店員のせいで小説進まないし。とつとと飲んで次のところ探そ」

麻衣、コーヒーを飲んで口を塞ぐ。

麻衣「うそ。なにこれ…おいしい！」

麻衣M「この香ばしい香りと深い酸味！それでいて旨味が詰まってる…」

麻衣、もう一口飲んでふうと一息。

ジャズテイストの音楽。

麻衣M「ジャズか。選曲もばっちり。深夜の落ち着いたバーにいるみたい」

麻衣、くつろいだ表情で視線を光に移すと目が合う。

光、麻衣を見てふわっと笑う。

目をそらす麻衣。

麻衣「あの人さえいなければなあ」

× × ×（時間経過）

麻衣N「その後も彼は」

光、テーブル掃除中。

麻衣、光を凝視。

女性客、光に近づく。

女性「光くん。一緒に写真撮ってもらえま

せんか？」

光「いいですよ」

女性客、キャピキャピ喜ぶ。

光「カメラ貸して？（自撮りで）はいチーズ」

麻衣「アイドルかよ？」

× × ×（時間経過）

麻衣N「その後も」

光、床掃除中。

麻衣、コーヒーを飲みつつ光を凝視。

女性、手を滑らせ食器皿が割れる。

光、女性の前で跪き手を握る。

光「お怪我ありませんか？綺麗な手が傷付い

たら大変」

女性「やだ光くん、心配性なんだから」

光「華さんは大事なお客さまだから、傷付い

たら俺がやなの」

女性「ごめんね、心配かけて」

光「ううん。すぐ片付けますね」

麻衣「ホストかよ？」

× × ×（時間経過）

麻衣N「極めつけは」

麻衣、カップの端に文字を見つける。

麻衣「ん？」

麻衣、カップをクルクルと回す。

『Zaiさん　ご来店ありがとうございます』

います！Have a good Coffee』

の文字。

麻衣「うをつつ。あざとい系か…」

麻衣、カップを置いて身震い。

× × ×

夜

麻衣、光を見ながら、

麻衣 M 「T h e モテ男。きっと色んな女の子

泣かせちゃうタイプだろうなあ」

麻衣、帰る準備中。

桜、髪をなびかせて女優風に入店。

麻衣、見とれる。

麻衣 M 「何あの子？天使？幻？ちょーかわい

い！」

桜、光を見つけて満面の笑み。

桜 「こー！！」

光 「あ、桜！」

光、桜に抱きつく。

麻衣 「え：」

桜 「ちよっと大袈裟だって」

光 「だって嬉しんだもん」

麻衣 M 「そっか。これが世の摂理だね」

麻衣、自分が着ているダサイ服と桜の
姿を見比べる。

光 「どした？」

桜 「寂しくて会いに来ちゃった」

光 「えーほんとに？」

桜「コンビニ終わったし」

光「おつかれ」

光、桜の頭をくしゃっと撫でる。

桜「（照れて）やめて」

麻衣「ご馳走様でした：」

光と桜、麻衣に気付かず話し続ける。

麻衣、店から出る。

桜「あとこれ。返す」

桜、光に漫画『彼氏彼女の事情』を渡す。

桜「貸してくれてありがとう。面白かった」

光「桜なら大歓迎！」

桜「今度、次の巻：」

店外

ドア越しに光と桜を見る麻衣。

麻衣「絵画みたいな二人」

麻衣、カフェを後にする。

○マンション・外観（夜）

○同・郵便受けの前（夜）

麻衣、郵便物を取る。

麻衣 M 「あれだけのイケメンと、あれだけの

美女がいたら二人が恋に落ちるの

は重力の存在くらい自然だし」

隣人の郵便受けから複数のかわいい手

紙が飛び出している。

麻衣「（郵便受けに向かって）モテ男は危険

だから。今日は引っかからないよー」

○同・麻衣の家・ベランダ（夜）

麻衣、自宅にいる親友・藤井瑠璃（2

8）と電話する。

以下、適宜カットバック。

麻衣「うん、そう、すごいイケメンがいた

の」

瑠璃「へー。そのカフェの名前は？」

麻衣「ジャーデインかジャルドン？みたいな」

瑠璃、スマホで検索。

瑠璃「あ、ジャルダンっしょ？」

麻衣「そうそう！」

瑠璃「やば、超イケメンじゃん、超ラッキー

じゃん！」

麻衣「ラッキーって何が？」

瑠璃「新しい彼氏でキンじゃない？ってこ

と！」

麻衣「いやいや今は仕事優先だから。それに

彼は彼女持ちだから」

瑠璃「そんな、なんでわかんのか？」

麻衣「今日彼女がカフェ来てて、帰り際にギ

ューってしてた」

瑠璃「なんだ彼女いんだ。わんちゃん私が付

き合っただけようと思ってたのに」

麻衣「なんで上から視線？」

瑠璃「まあそういう人ってチャラくて、遊ん

でて、あと」

麻衣「かわいい子ばっか狙う」

瑠璃「そうそうそう！」

麻衣「だから住む世界が違うよね」

○同・光の部屋（夜）

42

麻衣の隣の部屋。

光と大学の先輩・浏野洋介（29）、
オンラインゲームをしている。

以下、適宜カットバック

光「洋介さん！そこです、そこ！」

洋介「おっけーい」

光「うっしゅ、先輩ナイスー」

洋介「そっちもアシストグッド！」

光「あざっす！次のステージどこにします？」

洋介「悪い、今日は遅いからここまでで」

光「えー盛り上がってきたのに」

洋介「明日は朝早くに会議あるから無理」

光「洋介さんの会社、銀行ですよね」

洋介「なに？入りたくなった？」

光「俺はカフェがあるんで」

洋介「でもバイトだろ？」

光「：先輩は会社に好きな人とかいないんで

すか？」

洋介「いないけど？」

光「ふーん、そうっすか」

43

洋介「反応悪！そっちから聞いてきたんだろ」

光「すみません。：やっぱあと一回だけしま

せん？」

洋介「ったく、しょうがないな。一回だけだ

ぞ」

光「よっしゃ。そうこなくっちゃ」

○同・麻衣の部屋（夜）

先ほどの会話の続き。

瑠璃「でもいいなー私もイケメンに会いた

い！うちらも30手前だし、男らし

い運命の人に」

麻衣「会社にいないの？」

瑠璃「うーん、私の会社はさ」

× × ×（瑠璃の回想）

オフィスに瑠璃と複数の男性社員いる。

瑠璃の声「同期は私以外ほとんど男だけど、

みんな頼りない！なのにこの前さ」

× × ×（時間経過）

部長、全員の前で男性社員に賞状を

渡し、

部長「小杉さん、これからも頼むよ！」

瑠璃の声「私より仕事できない奴が褒められ

ててほんとムカついた！」

× × ×

麻衣「瑠璃は幼稚園からほんと負けず嫌い

だよね」

瑠璃「あいつより私の方が仕事量多いんだか

らね？」

麻衣「はいはい」

瑠璃「そんなわけで、今は仕事楽しくない！」

麻衣「瑠璃もそう思うことあるんだね」

瑠璃「私あんたが羨ましい」

麻衣「何が？」

瑠璃「きらきらしてて楽しそうだもん、小説

家って」

麻衣「え？全然そんなことないよ……」

瑠璃「何？なんかあった？」

麻衣「新作、販売停止になりました！」

瑠璃「うそ、まじ？ごめん」

麻衣「うん、まじなんだ：」

瑠璃「じゃあさ、これからどうすんの？」

麻衣「でもなんか短編 *short* 小説書いて週間

ランキング1位になったらまた普通

の小説書けるらしい」

瑠璃「それって会社でいうところのお荷物社

員ってことか」

麻衣「リストラ候補とか、お荷物社員とか。

私の肩書虚しいよ」

光がベランダに来る音。

仕切りで顔が見えない。

麻衣「（小声）瑠璃、ちよつとごめん。お隣

さん来たから部屋戻るね」

麻衣、部屋に入り、

麻衣「ごめんごめん！それで何だっけ？」

光、飲み物を飲んでいる。

○カフェ『ジャルダン』

ジャルダン前の道路

麻衣、やって来る。

麻衣 M 「あのコーヒーが忘れられなくて、また来てしまった」

店内

麻衣、レジに行くとオーナー・亀井千代（72）いる。

千代 「いらっしゃい」

麻衣、光の姿を探す。

千代 「光君目当てかい？」

麻衣 「いえ、そういう訳では……」

千代 「今日は午後から出勤だよ」

麻衣 「そうですか……でも本当にファンとかじゃありませんから……」

千代 「素直じゃないねえ」

麻衣 「（苦笑い）……」

千代 「なんにしましょう？」

麻衣 「今日は何がおすすめですか？」

千代 「今日はシウダーズとアンティグアのブ

レンドコーヒーがおすすめだよ」

麻衣 「じゃあそれをお願いします」

麻衣、千代の胸についたバッジを見て

47

麻衣「カフェ、ジャルダン、オーナー：」

× × ×（時間経過）

麻衣、吉田健吾（21）と有田亮（2

1）の隣に座って、パソコンを開いている。

麻衣M「今日こそ書き始めないと。今週の提

出間に合わないかも：」

麻衣、寝ているように俯き、キーのzを押し続ける。

麻衣M「わー私寝てないってば！」

と慌ててzを消し、うなだれる。

健吾と亮の話声が聞こえる。

健吾「え、お前それ浮気じゃね」

麻衣、『浮気』に反応。

亮「だって可愛かったんだもん綾ちゃん。で

も最近連絡多くてダルいんよな」

健吾「綾ちゃんメンヘラなんだく意外」

亮「俺の彼女もマジで重いんよ。てか女基本重くね」

麻衣、心の声をパソコンに入力。

48

麻衣 M 「え？浮気？この人浮気してる？」

健吾 「それ多分亮がメンヘラ製造機だ」

麻衣 M 「メンヘラ製造機って何？」

健吾 「この前、飲み終わった後どしたん？」

亮 「あのお持ち帰りした子？普通に俺んちで

してから連絡取ってない」

麻衣 M 「この人彼女いるんだよね？彼女いる

んでしょ？」

健吾 「えー俺連絡取りたいから連絡先教え

て？」

亮 「健吾の彼女ばれたらガチで怒るだろ」

麻衣 M 「あなたも浮気！」

健吾 「大丈夫だって。良い感じに嘘つけばバ

レないっしょ」

麻衣 M 「やっぱり男って：最低」

麻衣 N 「私には大学3年生の時、人生で初め

て彼氏ができた」

麻衣の姿が大学生らしく変化。

麻衣の前には元彼・杉山玄太（20）

が現れる。

玄太「麻衣ちゃんて映画見るの好き？」

麻衣「うん！好きだよ」

玄太「今度見に行かない？見たい映画ある？」

麻衣「うーん、玄太君が見たい映画でいいよ」

玄太「好きなジャンルは？」

麻衣「玄太君は何が好き？」

玄太「俺アクション好きなんだよ」

麻衣「じゃあアクション映画見に行こ」

玄太「：そっか、わかった」

別の日

二人の服装変化。

玄太「でさ、この前電車乗ったら隣のおじさ

ん突然歌い出してさ」

麻衣「（頷く）：」

玄太「ごめん！また俺ばっかしやべってた」

麻衣「全然平気だよ？」

玄太「：麻衣ちゃんは？最近なんか面白いこ

とあった？」

麻衣「私は：特にないかな」

玄太「：そうだと思った」

麻衣「ん？」

玄太「ううん：どっからだっけ？」

別の日

二人の服装変化。

険悪な雰囲気の中、麻衣がスマホで写真を見せる。

麻衣「これ、隣に写ってる女の子、誰？」

玄太「（舌打ち）：今付き合ってる子」

麻衣「え？私たち付き合ってるよね？なのに付き合ってる子って：」

玄太「じゃあさ、最近あった面白い話してみてよ」

麻衣「突然何？今はそんな関係ないでしょ」

玄太「やっぱり。言えないと思った」

麻衣「やっぱりってどういう意味？」

玄太「あの子、別れよう俺達」

麻衣「ちよっと待ってよ：原因は？私の話が

面白くないから？私といってもつまんないから？」

玄太「いや、俺が言いたいのは：

麻衣「ごめんね、私のせいだよ。でもこれ

から悪い所は直すから：

玄太「だからそういう俺の機嫌取りばかりで

薄っぺらい所だよ、俺が嫌いなのは」

麻衣「：

玄太「麻衣ちゃんには悪いけど会うのはこれ

で最後にしよう。お互いのためにも」

玄太、店から出ていく。

麻衣の服装が現代に戻る。

麻衣「お互いのためって、自分のためでしょ」

健太、亮が話している。

健吾「やった合計人数数えてる？」

亮「わからんけど2桁は超えてる」

麻衣、パソコンに無我夢中で入力。

× × ×（時間経過）

夜

人が少ない店内。

麻衣、執筆に熱中。

光は荷物を持って帰る間際。

麻衣「(Enter 押して)ふう」

麻衣、やり切った顔で時計を見る。

麻衣「もう8時だ：あっという間」

光「麻衣さん、お疲れ様です」

麻衣「あっどうも：」

光「麻衣さんて前もここでパソコン見てませ

んでした？仕事ですか？」

麻衣「ええ、まあ」

光「当てっちゃおっかな？翻訳家？」

麻衣「うーん、違います」

光「ジャーナリストとか」

麻衣「近いですけど」

光「じゃあ小説家！」

麻衣「え！あたり！」

光「だと思った！雰囲気がまさにそうですも

ん」

麻衣「そうかな？：でも私は小説界のお荷物

社員ですから。小説家とは言えない

かな」

光「じゃあ今書いてたのって小説じゃないん

ですか？」

53

麻衣「一応小説ですけど、短編のweb小説だから：」

光「それだって立派な小説ですよ。だから麻衣さんは小説家です」

麻衣「そうかな？」

光「そうですって。今ってどんなの書いてるんですか？」

麻衣「んー自分なりにリアリティある作品を作ってるつもりなんですけど、どうなんでしょう」

光「ちょっと見してください」

麻衣「え？」

光、パソコンを覗き込み距離が近い。

麻衣の心臓の音が鳴り響く。

光、小説を嬉々として読み進める。

○出版社・駐車場（夜）

高橋と高橋の担当が高級車に向かう。
担当「先生、本日の講演会も大盛況でしたね」

高橋「ファンの皆さんが喜んでくれてなによ
54
りです」

担当「次回作の執筆開始はいつ頃を：」

高橋「次回作についてはしばらく保留にさせてください」

担当「：？」

高橋「私も小説界ではもう中堅です。そろそろ新しい芽に水をやらないと」

担当「新人育成に手を広げるおつもりで？」

高橋「この出版社に所属の新人作家を何人か見繕っておいてください」

担当「新人作家のリストですね、承知致しました」

高橋「では、失礼」

高橋、車に乗り込む。

担当「はい、お気を付けて」

○カフェ『ジャルダン』（夜）

光、麻衣の小説を読み終えて、
光「これめっちゃ面白いじゃないですか！」

麻衣「え？：お世辞ありがとう」

光「本当ですって！ラストで浮気者が天国で元カノたちに復讐される所とか最高にスツキリしました！」

麻衣「わかる？テーマは“天国と地獄”じゃなくて“天国の地獄”みたいな！」

光「わかります、わかります！浮気する奴はバチ当たって当然ですから！」

麻衣「わかってくれてありがとう。（溜息）これもあと三か月か」

光「三か月？」

麻衣「そう。三か月以内にランキング1位取らないと小説続けられないの。でも正直できるのかな？って」

光「麻衣さんなら絶対1位になれます」

麻衣「（光を見つめ）…」

光「これ何作目ですか？」

麻衣「≪ゼロ小説だと1作目」

光「てことは俺、ファン第一号だ」

麻衣「うん。そうだね。ファン第一号」

光「ファン代表として応援しています！」

麻衣「ふふ。そう言ってくれてありがとう。」

おかげでちよつと勇気出た」

光「笑うともっとかわいいですね。麻衣さん

って」

麻衣「え？」

桜、入店。

桜「光？」

光「あ、桜！バイトお疲れ」

桜「光は？バイト終わった？」

光「もう終わって今帰るところ」

麻衣、気まずそうに二人を見る。

光「桜、こちら、最近常連になった麻衣さん」

桜「どうも、梶田桜です。駅前でコンビニの

アルバイトしてます」

麻衣「初めまして。篠崎麻衣です」

光「麻衣さんはね、小説家なんだよ」

麻衣「あ、いや、私はそんな」

桜「（遮って）よろしく願います」

麻衣「こちらこそ、よろしく願います」

光「じゃ、俺達帰ります」

麻衣「どうぞ、どうぞ。早く二人つきりになりたいでしょーし」

光「じゃあ遠慮なく。また来てくださいね！

桜、行こう」

桜「うん」

光と桜、出口に向かう。

麻衣、座る。

光「あ、そうだ」

光は戻ってきて、

光「麻衣さん！」

麻衣「ん？」

光「1位になったら絶対教えてくださいね！

それじゃ、また」

あっけにとられるが笑顔の麻衣。

ドアを開け、桜を通す光。

二人は近い距離で去っていく。

麻衣「：仕事、仕事」

麻衣、パソコンで作業する。

○道路（夜）

夜道を考えに耽って歩く麻衣。

麻衣「あの人って一体……」

× × ×（麻衣の回想）

カフェで女性客に囲まれる光。

女性客、キャピキャピ喜ぶ。

光「カメラ貸して？はいチーズ」

× × ×（麻衣の回想）

カフェで女性の前で跪き手を握る光。

光「お怪我ありませんか？綺麗な手が傷付い

たら大変」

× × ×

麻衣「でも、さっきは……」

× × ×（麻衣の回想）

光「浮気する奴はバチ当たって当然ですか

ら！」

× × ×

麻衣「他の男とは違うのかも」

○マンション・入り口前（夜）

麻衣、角を曲がってご機嫌で来る。

マンション入り口前で熱烈にキスする

男女。

麻衣「うわ、カップル？」

と物陰に隠れて様子を伺う。

キスをやめる気配なし。

麻衣「この時間に邪魔だなあ、もう」

よく見るとキスに熱中する男は光。

相手は桜ではない。

麻衣「え：？」

光、キスしつつ麻衣を見る。

麻衣、ハツとして目をそらす。

光、無視してキスに熱中。

麻衣「有り得ないってば」

○道路（夜）

早歩きの麻衣。

麻衣M「何？今の：私のこと見たよね？」

× × ×（麻衣の回想）

光がキスしつつ麻衣を見る。

× × ×

麻衣 M 「絶対に光君だった：でも光君には」

× × ×（麻衣の回想）

光と桜が抱き合う様子。

× × ×

麻衣 M 「てことは浮気？」

麻衣の頭上に『浮気ってこと？なぜ私のマンションの前？絶対気付いてたよね？あの女性は誰？』という疑問が浮かぶ。

麻衣、全部振り払って、

麻衣「やっぱり男っていつもこいつも最

低！」

麻衣、引き返して、

麻衣「てかなんで私が気使って遠回りしてる

わけ？」

麻衣、ズンズン歩く。

○マンションの前（家（夜））

麻衣、角から顔を出してマンションの

前を確認。

麻衣「いないよね…？」

男女はいない。

麻衣、入口へ。

麻衣「ほんと迷惑」

× × ×

麻衣、3階に上がり、ドアを開けて家に入る。

○同・麻衣の部屋（朝）

麻衣、目覚ましで起きる。

出かける準備をする。

準備が終わり、ドアに手をかけて、

麻衣「あのカフェもう行けないよ」

麻衣、ガチャッとドアを開ける。

と同時に隣の家のドアが開く。

麻衣が顔を上げると、それは光。

麻衣・光「え？」

○出版社・廊下／会議室

高橋、廊下を颯爽と歩く。

後ろには編集長・上田含む仕事関係者が複数。

担当「今度行われる、桐川恵梨香との対談は水曜日の予定です」

高橋「その日の取材は？」

担当「午後にまとめて全部で3つです」

高橋「了解」

上田「高橋先生、いつもお世話になってます。今回の新作も好調ですよ」

高橋「いえ、熱心なプロモーションのおかげです」

会議室に入る一行。

担当「こちら、例の新人作家リストです」

と担当が資料を提示。

高橋、資料を手に取りじっくり眺める。

高橋「（意味ありげに）篠崎麻衣さん…か」

おしまい